

第三十九回古民家歴史部会歴史探訪

「横浜開港150周年海防三浦半島の歴史を探る」

原本 朗 起稿

「Ⅱ」・西叶神社・浦賀奉行所跡・灯明台コース

平成21年5月7日(木)(集合京急浦賀駅改札前10時厳守)

行程；浦賀駅→西叶神社→常福寺→愛宕山公園→浦賀奉行所跡→為朝社→灯明堂→バス移動「灯明堂入口」(15分)→浦賀駅着。

- 1・西叶神社(浦賀駅バス紺屋町下車5分・祭神菅田別尊, 相殿比売大神, 息長帯比売村カガタシメ命・境内社巖島神社他7社・例祭9月15日・宝物古円鏡, 太刀1口, 八幡大菩薩名号, 巻物, 祭神は応神天皇で、社伝では、養和元年(1181)京都神護寺の文覚上人が御神霊を石清水八幡宮より勧請したと伝える、治承年間(1177~81)に源頼朝が源氏再興を石清水八幡宮に祈願し、願いが叶った時には適地に一社を建立すると言う願いをかけ、見事大願成就したので、文治2年(1186)叶大明神と命名し此処に建立したとも伝えられる。
以来、港として栄えた浦賀の鎮守として地元の人々や、港に出入りする人々の厚い信仰を得てきた。しかし、天保8年(1837)浦賀の大火により建物は消失現在のものは天保13年(1842)再建されたものである。本殿と幣殿は総檜造り、拝殿は総樺造り、内部は漆による彩色があり、花鳥草木の透かし彫りの74面格天井は、実に華麗で素晴らしい。この制作は江戸後期の彫刻師後藤利兵衛があたった。そして7年の歳月と3000両を要したと言う。この費用は浦賀の間屋衆の協力と伝えられ、当時の浦賀商人の経済力が伺える(灯籠；遊郭の主人達)。東福寺(曹洞宗逗子沼間海宝院末・延命山・本尊十一面観音立像・三浦観音札所13番・地藏33番 札所)
天正9年(1591)寺領2石, 創立明応9年(1500), 開山は一機直宗(慶長19年, 1614寂)
- 2・常福寺・庭園(浄土宗・放光山延寿院・本尊三尊阿弥陀, 阿弥陀如来, 観世音菩薩, 勢至菩薩・寺宝地獄極楽絵図伝狩野常信画・庭園見学要予約有料)
文明年間(1469~87)鎌倉光明寺第6世順譽了恵大僧正の弟子円蓮社教誉上人の開創と言う。享保5年(1720)浦賀奉行所設置以来、奉行所の御用寺院となり、代々の浦賀奉行勤番交代(事務引継)が行われた。閻魔堂以外は火災で焼け江戸初期の建物である。現在の本堂は藤沢龍口寺のもので、本覚寺を経て移築(大正9)されたものである。庭園は享保年間(1716~35)の檀家浦賀回船問屋気仙屋長七が私財を投じ築造された見事な庭園である。墓地に浦賀奉行所名与力合原雄左衛門や佐々木倉安左衛門等代々、与力関係者の墓・侠客義人江戸屋半五郎一家の墓。
- 3・愛宕山公園(別名浦賀園・長谷川長綱三浦代官屋敷跡・中島三郎助招魂碑・咸臨丸出航碑)
明治26年(1893)開園した、市内最古の公園で、景勝地にある。又、此処は陣屋山とも言い、江戸時代初期に三浦の代官長谷川長綱の館があった場所と言う。
園内には公園開設のきっかけとなった浦賀奉行所与力の中島三郎助招魂碑がある。明治24年(1891)の建立で、碑文はかつての同志の外務大臣榎本武揚(タカキ)によるものだ。三郎助は嘉永6年(1853)ペリー浦賀来航した際、日本人として最初に乗り込み、交渉に当たった人物である。その後、西洋式の造船技術をオランダ人より学び、我が国最初の洋式船「鳳凰丸」を浦賀で造船し、長崎の海軍伝習所第一期生として、日本海軍史上忘れられない一人だ。一方で漢詩、和歌、俳句も嗜み、浦賀の文化人との交流も広がったが、明治2年(1869)幕府と運命を共にし、函館五稜郭に榎本武揚らと立てこもり、二人の息子と壮絶な戦死を遂げている。咸臨丸出航の碑。
- 4・浦賀奉行所跡(現住友重機社宅所在地・1720, 享保5年下田から浦賀へ移転)
社宅の周囲をよく見ると、当時の石垣と塀が現在も残っている。此が浦賀奉行所跡である。浦賀奉行所の前身は、元和2年(1616)伊豆下田に置かれた伊豆下田奉行所である。社宅の入口の溝に架っている石橋は下田奉行所から運ばれた石材で出来ている。江戸の人口増大に伴う江戸流入商品流通を掌握する為に江戸に近く、港も深く広い浦賀に奉行所が移された。
- 5・為朝神社
西浦賀の浜町に残る民俗芸能虎踊りは伊豆下田から浦賀に奉行所が移されると一緒に伝えられたと言う。毎年6月の為朝神社の祭礼に奉納される。
- 6・灯明堂跡(高さ1.8m、幅3.6m四方石垣・平成3年建物復元されている)

慶安元年（1648）幕府の命により石川左衛門重勝・能勢小十郎頼隆らが築造したと伝えられ、木造二階建ての日本式灯台で、一階は番人小屋・二階は四方を紙張りの障子に金網をめぐらし、その中に直径36cm、深さ12cmの銅製の灯明皿を置き、菜種油を使用し海上を照らした。その光は海上7kmも届いたと言う。当初は勘定奉行所管であったが、元禄4年（1872）浦賀の干鰯問屋が明治5年（1872）まで維持管理し役目を終えた。この近くには、昔「首切り」場と呼ばれた場所があり、巨大な題目塔や地藏菩薩像の供養塔がたっている。浦賀奉行所処刑場説ある。本跡から、300m程の海岸沿いに海に突き出た場所は幕府江戸湾防衛のため、嘉永元年（1848）築造した千代ヶ崎台場跡。

7・番所跡（船の関所）

武器・女人無断出国・生活必需品（米・酒・油・炭・薪・綿類等）商品浦賀通過数は3ヶ月に一度江戸勘定奉行に報告。舟改め実務浦賀回船問屋の人々・下田から移って来た下田問屋63軒・東浦賀20軒・西浦賀22軒総称して三方問屋。船の大きさに応じて石銭と問屋料を徴収した（石銭、税金10石3文・問屋料、船乗り人数に対し、1人銀1匁8分）。石銭は城ヶ島等の篝火代金となり、問屋料は回船問屋手数料。

その他の見所；番所跡・徳田屋跡・東叶神社・東林寺・干鰯問屋跡等多い。

浦賀奉行所メモ

イ・渡し船（海上280mを走る横須賀市道2073号線は珍しい）。愛宕丸

明治11年（1878）、宮下町など17の町が共同で始めた、昭和18年浦賀が横須賀市と合併し、市営となった。同年24年民間委託方式、船は市所有。

ロ・咸臨丸1860（万延元）1月19日浦賀出航

目的；日米修好通商条約の推進交換の遣米使節に随行の為の渡米、5月5日帰国。300トン、オランダで建造（安政4年、1857）・96人乗り、長さ50m、幅7.3m、100馬力、3本マスト・5月5日咸臨丸祭り。

ハ・浦賀奉行所・相模国浦賀（横須賀）

江戸幕府直轄（遠方国奉行）奉行所、享保5年（1720）下田から浦賀へ移され、幕領民制、江戸への出入船舶の検査に当たり、陸路箱根関所に比すべき存在であった。嘉永6年（1853）ペリー来航時、井戸弘道・戸田氏栄両奉行がその応援に当たった。東西270m、南北216m、1800坪・奉行所・奉行住宅・長屋・砲術稽古場など600坪・海岸には番所回船問屋当時104軒で荷主代理船員宿泊など営み大いに繁盛。明治5年（1873）廃止。町奉行所；京都・大阪・駿河等。遠国奉行所（幕府直轄）；長崎・浦賀・兵庫・箱館・伏見・奈良・山田・境・佐渡・新潟・日光・下田・神奈川等要地奉行所。

ニ・為朝神社の虎踊り（西浦賀の浜町に残る民族芸能・県民俗）

伊豆下田から伝緒、毎年6月祭礼に奉納。虎頭が久里浜（天神社）、野比（白髭神社）に残されている（虎頭は全国880神社のお札で作られていると言う）。

虎踊り；（1）少年、和籐内登場、衣装は歌舞伎的近松門左衛門「国生翁合戦」を取り入れる。

（2）子供（中国風服装・童子=唐子カコ）多数登場。

（3）大小二頭の虎（虎頭・トカシ）登場、鞠遊び、曲芸する。

（4）和籐内（ワフナイ・少年名）が暴れる虎を叶神社のお札で取り押さえる。

（5）歌舞伎近松門左衛門「国姓爺合戦・コシウカッセン」が取り入れられている。

